

今日の説教のポイント <使徒言行録 11 章 27-30 節>

①信じただけでなく、その後学ぶ中から出て来た愛のわざ

アンティオキアの信徒たちはキリストの救いをただ信じたというだけでなく、その後、パウロとバルナバから主の教えを丸1年間しっかり学びました (26 節)。そのことから大飢饉に遭ったユダヤの信仰の兄弟たちを援助しようとする取り組みが生まれたかのように 27 節以下は記されています。信仰は自分の救いを願うことから始まり、主の十字架の死によってもう救われているのだと知らされることに進み、ついに自分の救いについてではなく他者が救われることを祈り取り組むように導かれて行くのです。そのようになれるにはどうしたらいいか？ 主が教えられたことを聖書から学び続け、それに従って生きること。それが神様が示して下さった恵みの道なのです。

②預言とは、他者や教会を造り上げることに仕えるもの

アガポという預言者が来て大飢饉を予想し、その通りになりました。私たちは将来を言い当てたことに驚きます。しかしこの箇所全体で言おうとしている大事なことは、その後どうしたかです。I コリント 14 章 1 節以下でパウロは、「異言は自分のためのもの、預言は他者のためのもの、だから預言がまさっている」、と教えています。預言を聞いたアンティオキアの信仰者たちが苦難にあるユダヤの兄弟姉妹たちを助けようとしたのは、この預言の役割に適った正しい行為でした。アガポは 21 章 11 節でもパウロの最後を予言します。それは主のために苦しんで終わるといふ預言です。

③個人としてではなく、主の共同体として行う愛のわざ

私たちは今、歴史上かつてなかったほど私的・個人主義的に生きる要素の強い現代社会を生きています。私たちキリスト者もそれに染まっています。しかし、新しくキリストにあって生まれた者たちの共同体 (教会) の枝として生きる私たちは、「神の国まで続く “神の家族” という共同体全体で考える」取組観を身につけたいと思います。ここでは援助の取組に、「それぞれの力に応じて」取り組んだ (29 節) と記されています。それでいいのです。「私がどれだけした」から「私の家族 (主の共同体) 皆で精一杯した」という考え方でいいのです。その考え方が本当に身につけて来る時に、この神様の共同体、教会に加わることできた平安が得られるようになるでしょう。